

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

花 立 遺 跡

カラコミ遺跡

牛 池 遺 跡

1989

長岡市教育委員会

序

長岡市内には200ヶ所を超える遺跡があり、そのほとんどは遺跡の規模・内容等が不明です。この報告書は国・県の補助を得て、年次別に遺跡の概要等を解明するために昭和62年度から始めました遺跡確認調査の第2年次の記録です。

調査の結果、遺跡の概要等を知ることができ、今後の埋蔵文化財の保護や諸開発に伴う保存協議の資料として貴重な手がかりを得ることができました。

今回の調査にあたり、多大な御指導・御助言をいただきました文化庁・新潟県教育委員会をはじめ関係各位に対し、心からお礼を申し上げます。

平成元年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

例　　言

1. 本書は昭和63年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡群発掘調査」の報告書である。	1. はじめに	1
2. 調査は長岡市教育委員会が主体となって、昭和63年8月20日から9月9日まで大積地区の花立・カラコミ・牛池遺跡の3遺跡を対象に行った。	2. 花立遺跡	2
3. 遺跡の写真撮影・測量は駒形が行い、遺物の図面は土製品・石器・石製品は広井造氏（新潟大学学生）、第13図21・22は小熊博史氏（長岡市市史編さん室）が、その他を駒形が作成した。	3. カラコミ遺跡	6
4. 本書の執筆は各遺跡とも立地は横関大二氏（奈良大学学生）、遺物のうち石器を広井氏が執筆した原稿を参考に駒形が全体をまとめた。	4. 牛池遺跡	9
5. 花立・牛池遺跡の土層柱状図（第4図・第11図）の凡例はカラコミ遺跡の土層凡例（第9図）と同じである。	5. おりに	14
	調査体制	14
	調査に御指導・御協力を いただいた方々	14

1. はじめに

長岡市内には国指定史跡の馬高・三十船場遺跡、藤橋遺跡、県指定史跡の栖古城跡をはじめ200ヶ所以上の遺跡が所在している。そのうち古墳や塚及び山城跡などは現況から位置・形態・規模等の推察は容易だが、畠地などの平坦地にある集落跡などはこれらの推計が難しい。このため、宅地造成や土砂採取等の諸開発との調整協議にかかるデーターは充分であるとは言えない。長岡市教育委員会ではこのような状況を憂慮して、昭和62年度から国・県の補助金の交付を受けて遺跡の確認調査を実施して、データーの整備に努めてきた。昭和62年度は土砂採取工事や産業廃棄物処理場建設が盛んな長岡市の南部——大積地区の4遺跡を対象に確認調査を実施し、磨製石斧1点が採集された地点が遺跡でなかったこと、既に工事等で消滅していることなどを確認した。

大積地区的遺跡の確認数などについては昨年度の報告でも述べたが、1950年代の丸山松夫氏を中心とした大積中学校の成果が充分に現在へ伝わっていない(註)。長岡市教育委員会はこのことや大積地区では土取りや産業廃棄物処理場建設が盛んなことなどから、大積地区に確認調査の重点をおいて調査を進めることにし、昭和62年度に統いて本年度も大積千本町地内の花立、カラコミ、牛池遺跡で確認調査を行った。

註「長岡市内遺跡群発掘調査報告書—金塚B遺跡・キザワシ遺跡・百合畠遺跡・焼山遺跡—」

長岡市教育委員会 1988年



第1図 遺跡位置図 (1/50,000: 柏崎)

1. 花立 2. カラコミ 3. 牛池

2. 花立(はなたて)遺跡(第2図~第5図)

所在地 長岡市大積千本町字宮田673・725

立地(第2図) 大積千本町の西で、南北に延びる丘陵の東側緩斜面に位置する。北には沢が入り込み、1・2Gから9・10G付近に狭い平坦面が広がる程度の山の中腹である。かつては畑だったが、現在は狭い土地での畑作をやめて、杉の林になっている。標高約145m。

調査(8月20日~8月25日) 花立遺跡は大積中学校が1952年に発掘を行い、繩文後期の三十種場式上器と石鏃1点を発見した。遺跡の範囲は報告の中で今後の研究に待つと結んでいる(注)。今次調査はこのことも受けて遺跡の範囲確認を主な目的として実施した。調査グリットは林の空間を巡んで大小11グリットを設定した。

調査の結果 花立遺跡の確認調査で遺物が出土したグリットは1Gと9Gそれに2Gの南西の隅で、他からはまったく出土しなかった。また、遺構は今次調査で設定したグリットからは発見されなかった。

土層序(第4図) 花立遺跡の基本土層序は上から表土(I)・黒褐色土(II)・茶黃色土(III)・地山(IV)の4層で、1・9Gと2Gの南西隅にみられた。いずれも遺物が出土したグリットで、第II層が遺物包含層である。3~8・11Gは地山の上には5cm以内の表土がのっているだけで、2Gでも土器が出土した南西隅以外では3Gに近くにつれ薄い表土だけになってしまふ。おそらく1Gから9Gを結ぶ線に向かって地山面が極く浅い摺鉢状になっていると思われる。なお、1Gの中央付近でI・II層が擾乱していること、遺物が出土しないことから、



第2図 花立遺跡周辺の地形図(1/10,000)



遺跡遠景（北東から）



遺跡近景（南から）



発掘風景



埋め戻し風景



石斧・縄文土器出土状況 (1G)



9 G発掘状況

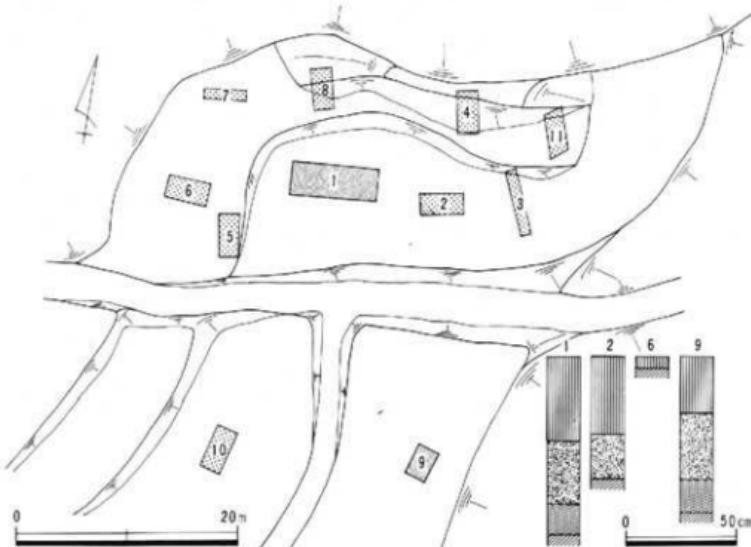
第3図 花立遺跡

この部分が1952年の大積中学校の発掘箇所かと思われる。

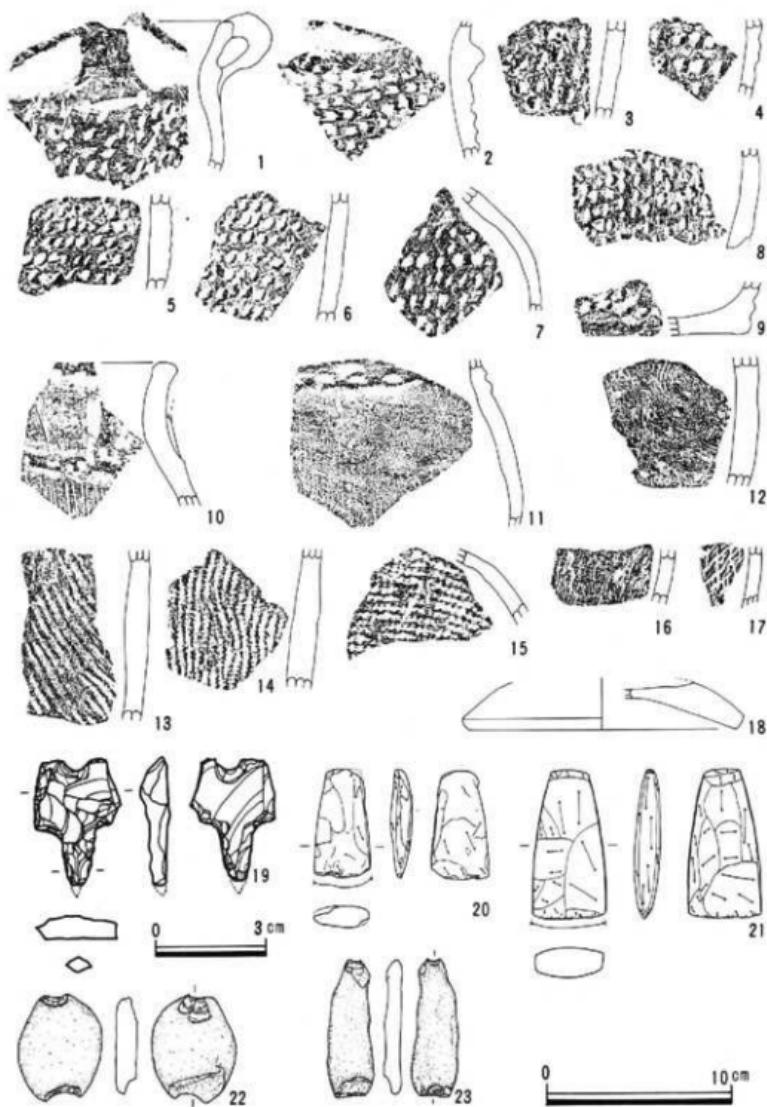
遺物 (第5図) 今次調査で出土したのは縄文土器片が637片（総重量11.3kg）と石錐1点、磨製石斧2点それに石錐の2点である。縄文土器は後期前半の三十稻場II式の刺突文土器群に限られる。1～9は刺突文土器で、口縁部が「く」字に外反し、胸部が丸みを帯びて膨らむ器形を呈し、口縁から頸部にかけて橋状把手が付いている。18は刺突文土器に伴う無文の蓋である。10・11は橋状把手のかわりの隆帯が口縁から頸部にかけて貼付く櫛描き文の土器で、12は曲線モチーフの櫛描き文が施されている。13～15は縄文が、16は燃糸文が、17は格子目状の燃糸文が施されている。19は基部にノッチの機能を兼ね備えている先端を欠損した粘板岩製の石錐で、重量4.3g。20は安山岩製の磨製石斧（重量28.8g）、21も磨製石斧（重量80.1g）で、刃部に使用痕が顕著にみられる（蛇紋岩製）。22・23は両端を打ち欠いただけの砾石錐で、22は流紋岩製（重量43.9g）、23は安山岩製（重量21.9g）である。

まとめ 花立遺跡は縄文後期前半（三十稻場II式期）の一時期に縄文人が活躍した場である。石の道具からは花立が住まいの場と考えられるが、今次調査で竪穴式住居跡や柱穴などの遺構が未検出のため、積極的に住まいであるとは言えない。なお、花立の遺跡としての広がりは遺物や第II層の状況から1・2Gから9Gを結ぶ線を中心とした範囲と思われる。

註 丸山松夫「遠古の郷土—三島郡二和村大積地区の縄文文化—」(孔版刷) 1956年



第4図 花立遺跡グリット図及び土層柱状図



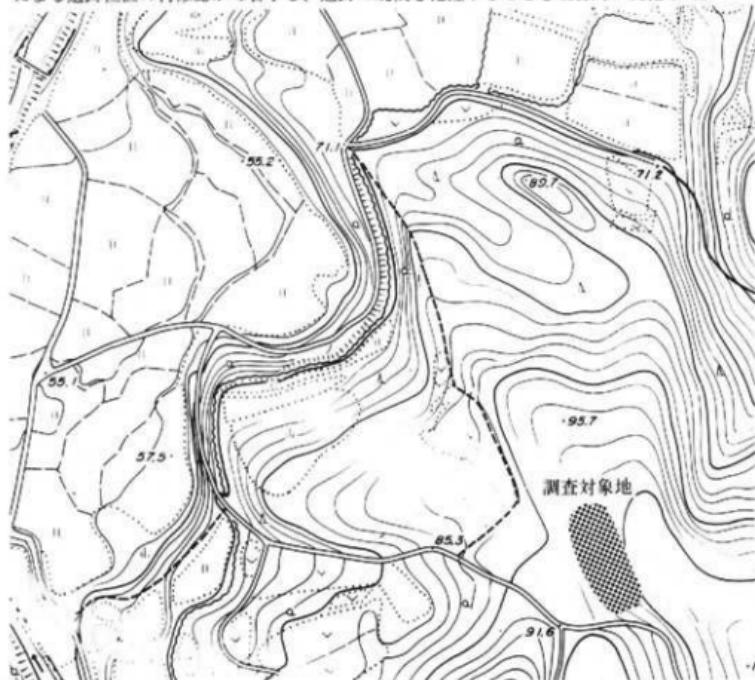
第5図 花立遺跡出土品

3. カラコミ遺跡（第6図～第9図）

所在地 長岡市大積千本町字原新田206

立地（第6図） 大積千本町と大積灰下町とを分ける南北方向に延びる丘陵の北端に近い丘陵西側斜面中腹の平坦部に位置する。かつては畠であったが、現在は杉が植林されている。標高約95m。

調査（8月26日～9月1日） 大積地区の遺跡は戦中・戦後の食糧難のころに畠地として開墾され、1960年代後半ごろに畠作を休止し、荒地になったり、杉が植林されている土地が多い。遺跡としての発見は畠作を行っていた1950年代に、大積中学校の調査によるものが多い。そして、現在では荒地・杉林のため、遺物の表面採集が不能で、遺跡の位置すら確認が困難な場合が多い。カラコミ遺跡も畠の耕作中に壺が発見されたことがきっかけであるが、現在ではその土器の所在や発見位置は不明である。このため、今次調査は数人からの聞き込みによる遺跡位置の再確認から着手し、遺跡の規模を把握することを主目的に実施した。



第6図 カラコミ遺跡周辺の地形図 (1/2,500)



遺跡遠景（南西から）



遺跡遠景（西から）



発掘風景



発掘風景



縄文土器出土状況（5 G）



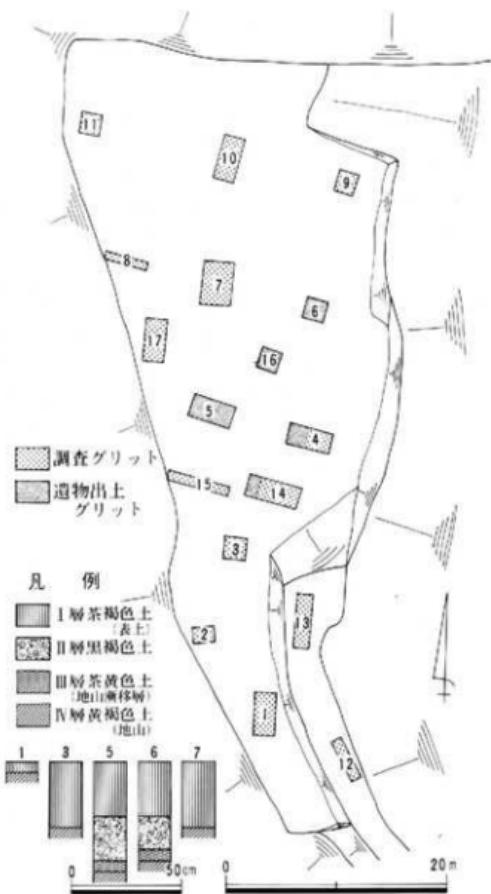
5 G発掘状況

第7図 カラコミ遺跡

調査の結果 カラコミ遺跡の規模を確認するために杉林の調査対象地に大小17の調査グリットを設定して試掘調査を進めた。このうち、縄文土器が出土したのは5・16Gと周辺グリットである。遺物は縄文土器しかなかった。また、縄文時代の造構は発見されなかった。



第8図 カラコミ遺跡出土土器



第9図 カラコミ遺跡グリット図及び土層柱状図

土層序 (第9図) カラコミ遺跡で花立遺跡の基本土層序と同じ土層が見られたのは5・6・16・4・14Gの西側の一部であった。他は浅い表土で地山となり、幾つかのグリットには伐根と思われる凸凹の面がみられた。

遺物 (第8図) カラコミ遺跡出土の遺物は縄文土器が65片(総重量1kg)だけで、石器等の土器以外の道具は出土しなかった。時期は文様が施されたのが口縁直下に1条沈線が巡る浅鉢の1だけで、他は無文のため不明であるが、土器の胎土や沈線の様子から後期中ごろかと思われる。

まとめ カラコミは花立同様住居等が未検出であるが、遺物出土位置や第II層の分布状況から5・16Gを中心とした狭い範囲が開墾から残された生活の痕跡と思われる。

4. 牛池(おしけ)遺跡(第10図~第14図)

所在地 長岡市大穂千本町字千代の越17甲

立地(第10図) カラコミ遺跡が所在する同じ丘陵の東側緩斜面で、灰下川に面している。調査地は丘陵から瘤状に突き出た小さな尾根がえぐれた様な比高差約3.5mの緩斜面で、東は灰下川への急崖となっている。なお、調査地の北側は土砂崩れの痕跡をとどめている。調査地の現況は荒地、標高約90m。

調査(9月2日~9月9日) 牛池遺跡の発見から今日までの過程はカラコミ遺跡とは同じで、相違点は荒地か杉林かの現況だけである。調査はまず、調査地への進入路の草刈などルートの開設から着手した。調査グリットは $2 \times 4\text{ m}$ を基本に、対象地全域に設定した。

調査の結果 調査グリットは2m高い北側の痩せ尾根状の狭いところに3グリット、1Gと9Gで3.5mの比高差がある面に10グリットを設けた。縄文土器等の遺物は北側の12・13Gで小量が、下の面では北側の尾根に近いところの5・8・10Gで出土した。

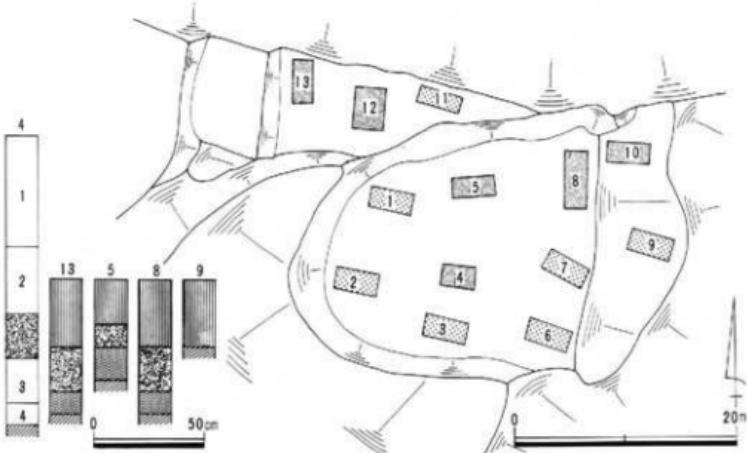
土層序(第11図) 牛池遺跡で遺物包含層と思われる第II層が堆積しているグリットは5・8・10・12・13Gである。いずれも縄文土器等の遺物が出土している。下段では一部のグリットに沢の埋没土らしい土砂がみられた。2・3・4・6Gがそのグリットで、4Gでは縄文



第10図 牛池遺跡周辺の地形図 (1/2,500)

土器の小破片が5点出土した第II層を挟んだ上層の1(灰黒色土)・2層(暗い灰黒色土)、下層の3(黒黄色土)・4層(チョコレート色土)で、5・8Gなどの土層と異なっていること、粘質を帯びていること(3・4層)、いずれにも地山の小塊が含まれていることなどから、沢の埋没土と考えた。4Gの堆積土は南及び東に傾斜し、3Gは北及び東へ、6Gは東へ、2Gでは西辺から1mほど東に寄ったところから1・2層が現れ、東方向に傾斜していた。このことから沢は2Gを谷頭にして3Gと4Gの間から6Gを通って東へ流れていたものと思われる。なお、4G出土の縄文土器は第II層の位置が表土下80cmの埋没沢の中であることなどから流れ込みと思われる。

遺物(第13・14図) 牛池遺跡出土遺物は縄文土器(第13図)が2,130点(総重量20.8kg)、土製耳栓が1点(第14図1)、石棒が2点(第14図2・3)、磨製石斧が1点(第14図4)、凹石が2点(第14図6・7)及び凹石らしいものが1点(第14図5)である。縄文土器は後期後葉の瘤付き土器の一群で、主に8・10Gの出土である。1~15は深鉢形上器で、1~4は口縁に小さな三角形突起が付いている。深鉢の文様は磨消縄文の手法が主で、2・6・7・12~14には入り組み文がみられる。12~14は胸部がすばまる深鉢のくびれ部分と思われる。16~20は口縁部が円筒状で胸部が膨らむ壺形もしくは注口土器の口縁部(16~18)と胸部(19~20)である。21・22は注口土器の注口部分で、21は磨消縄文が、22は16・17と同じく弧線連結文が描かれている。23~25は浅鉢形上器で、23は入り組み文がみられる。34~38は底部破片で、平底の他に高台底(37・38)もある。34は底面に網代痕が付いている。耳栓は重量2.8g、朱彩はみられなかった。2の石棒は粘板岩製で、重量54.9g、3の石棒は重量29.7g、砂岩製の



第11図 牛池遺跡グリット図及び土層柱伏図



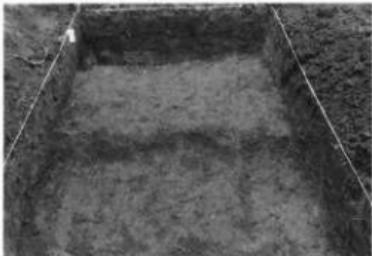
遺跡遠景（東から）



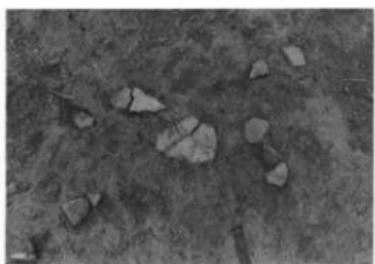
調査対象地（草刈り風景）



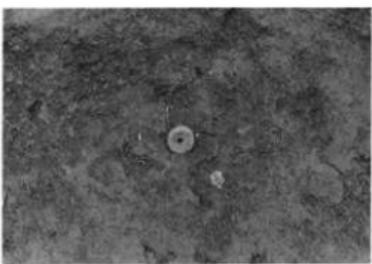
発掘風景
(向うに産業廃棄物処理場がみえる)



10G完掘状況

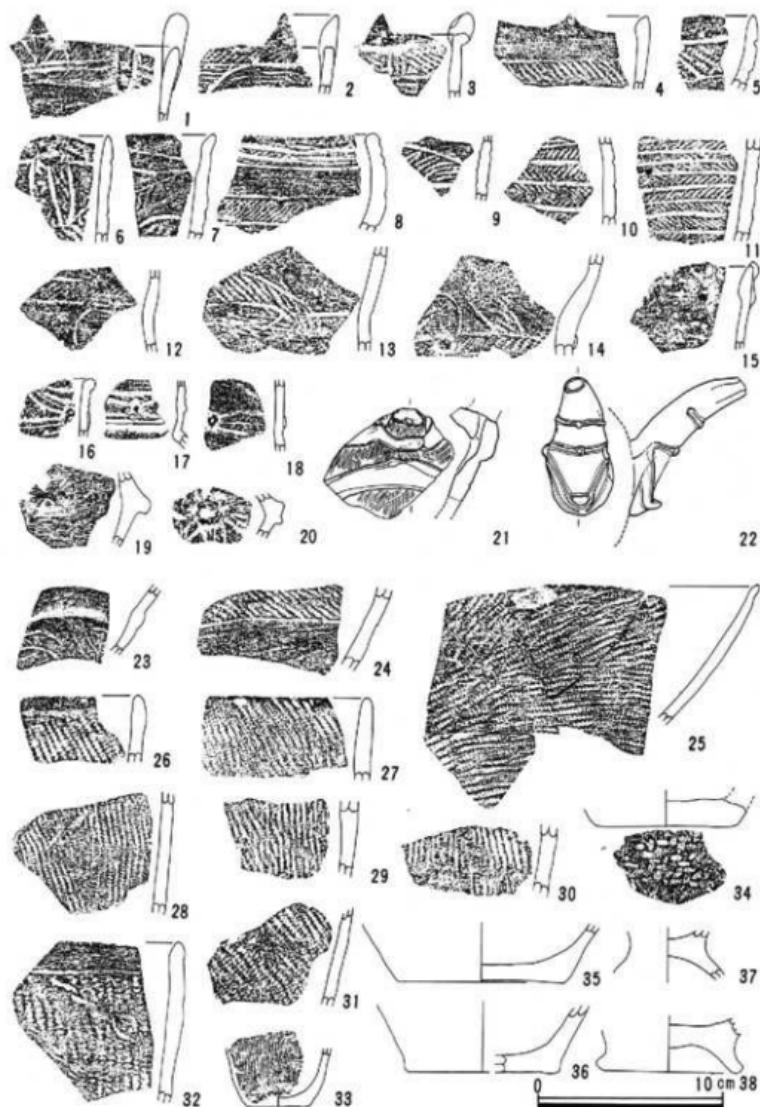


縄文土器出土状況（8 G）



耳栓出土状況（8 G）

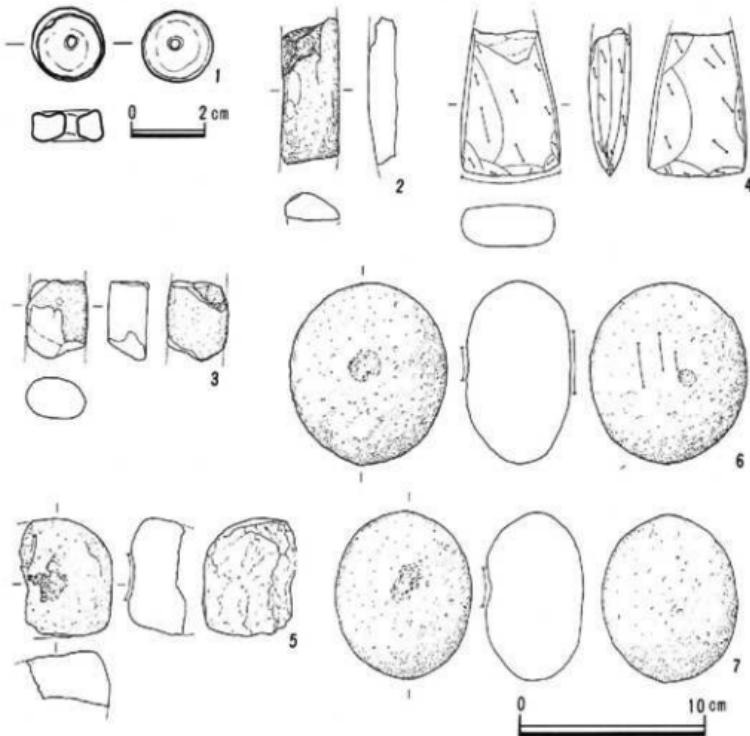
第12図 牛池遺跡



第13図 牛池遺跡出土土器

保存状態が悪い石棒。4は上部欠損の流紋岩製の磨製石斧である(重量173.9g)。5は片面に使用痕と思われる凹みがあるが、用途は不明。安山岩製で、重量121.6g。凹石はいずれも片面に敲打痕と思われる凹みがある。6は反対の面に磨痕が観察され、磨石の機能も持った凹石である。6の重量は652.9g、7は472.6g。

まとめ 牛池遺跡は出土土器から縄文時代後期後葉の遺跡で、しかも石斧や凹石の石器、それに装飾品の耳栓、呪術的な石棒があることから縄文人の生活の匂いが強くする。遺物や第II層が分布している上段や、下段でも上段寄りの部分が遺跡としての範囲かと思われる。しかし、今次調査の対象地では遺構が未検出なこと、90%近い遺物を出土した8・10Gが傾斜地にあたることなどから、住居など生活の根拠地が調査対象地以外にあった可能性も否定できない。推測するならば、土砂崩れで発掘調査が不能な調査対象地北側もその候補地の一つにあげられよう。



第14図 牛池遺跡出土土製品(1)・石製品(2・3)・石器(4~7)

5. おわりに

長岡市教育委員会が土地の現状変更を伴う開発との協議調整の資料作りを主な目的として遺跡確認調査を昭和62年度から行うことになり、土取り・産業廃棄物処理場建設など開発が頻繁な大積地区で昨年度と今年度の2か年継続して調査を実施した。大積地区を継続して調査する事由の中に、遺跡の位置確認すら容易でない点が含まれていることは再三指摘されている。おそらく来年度以降も他の地域で緊急な事態が生じない限り数年間は大積地区を対象にこの確認調査を実施する予定である。

ところで、今年度調査を行った遺跡はいずれも縄文時代後期の遺跡で、遺物及び遺物包含層の第II層の分布状況から小規模な遺跡であることが確認された。3遺跡とも千本川、灰下川、黒川よりもかなり高いところに位置していた。大積地区的遺跡で昨年・今年度調査した遺跡は、最寄りの河川よりかなり高いところに立地している。そして、規模は既に土取りで消滅していたキザワシを除いては小規模であることが推察される。また、2ヶ年の調査では遺構が未検出である。この現象も大積地区における縄文人たちの活動の様子を探る上で一つの手がかりにならう。もちろん、堅穴式住居跡が検出された七軒町（縄文早・中期）、長さ82cmの石棒採集の墓沢（縄文後期）、平山（縄文後期）など河川との比高が低くて遺構検出の遺跡を念頭において考えねばならないが。今後、開発との協議資料を整備する中で、大積地区全体を見通した縄文時代遺跡の性格を考える資料をも増加することを期待したい。

調査体制

調査主体者	長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）
調査担当者	駒形敏朗（長岡市教育委員会）
調査作業員	地元老人クラブ有志
調査事務局	西岡富雄（長岡市教育委員会社会教育課長）、清水正一（同課課長補佐） 鈴木孝行（同課庶務係長）、長谷川勉、芳賀代志栄、笠原敏和（同課職員）

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

片桐清市・太刀川久訓・丸山益雄（以上土地所有者）

猪俣栄一・小熊博史・柄倉末作・名塚毅夫・藤巻正信・堀一之進・丸山武義・
丸山久夫・丸山松夫

長岡市内遺跡群発掘調査報告書

花立遺跡・カラコミ遺跡・牛池遺跡

平成元年3月24日印刷 平成元年3月30日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：(株)あかつき印刷
